

## 鳥海山・飛島 現地審査報告書（公開版）

## 【日程】

- ・ 2016年8月12~15日

## 【現地審査員】

- ・ 日本ジオパーク委員会：菊地 俊夫（日本地理学会）
- ・ 日本ジオパーク委員会：大野 希一（日本火山学会）
- ・ 日本ジオパークネットワーク：新名 阿津子（山陰海岸ジオパーク）

## 【現地対応者（所属、敬称略）】

横山忠長（会長、秋田県にかほ市長）、丸山至（副会長、山形県酒田市長）、長谷部 誠（監事、秋田県由利本荘市長）、時田博機（監事、山形県遊佐町長）林信太郎（アドバイザー、秋田大）、鎌田憲太郎（アドバイザー、環境省）、村井仁（ガイド・教育・防災部会長、遊佐鳥海観光協会事務局長）、佐々木広美（産業・広報・啓発部会長、にかほ市商工会事務局長）、伊藤良孝・太田良行・畠中裕之・島貫陽・佐々木堅士・渡部進（以上、ジオガイド世話人会）阿部一男・五十嵐和一・池田克彦・伊藤良明・大江進・工藤純・小松和彦・小松礼子・今野幸男・佐々木昌喜・佐藤一隆・佐藤甚幸・佐藤正俊・佐藤眞由子・佐藤幸也・鈴木義明・須田祐司・須藤健一・相馬孝一・高岸康雄・高橋治・戸田久一・羽山みち子・樋口信義・豊後富也・保科恵一・松本小三郎・森寛（以上、ジオガイド研修生）、栗津尚悦（秋田県振興部長）、會田敦士（山形県企画振興課副主幹）、齋藤稔（山形県庄内総合支庁長）、大泉定幸（山形県庄内総合支庁観光振興室長）、荒川敏男（酒田市八幡総合支所）、小野一彦（秋田県由利本荘市副市長）、本宮茂樹（山形県遊佐町副町長）、長濱修（とびしま未来協議会会長）、澤口興四一（飛島観光協議会会長・飛島勝浦地区区長）、佐藤豊（飛島中村地区区長）、渡部和夫（飛島法木地区区長）、齋藤繁（酒田市八幡地区自治会長会会長）、小笠原廣昭（一条地区 市一条区自治会会長）、信夫効次（観音寺地区栄町自治会会長）、佐藤修弥（観音寺地区 小泉一区自治会会長）、齋藤文之（日向地区 下黒川自治会会長）佐々木好信・岸本誠司・相馬央・池田智己・佐林祐輔推（以上、鳥海山・飛島ジオパーク進協議会事務局）

## 【見学地点】

- ・ 8/12 事前説明会
- ・ 8/13 飛島：館岩・賽の河原・ゴトロ浜・御積島・烏帽子群島  
酒田：観音寺コミュニティセンター、玉簾の滝、イヌワシみらい館
- ・ 8/14 遊佐：牛渡川・丸池様、鳥海温泉遊楽里、釜磯湧水、大平山荘  
にかほ：稲倉山荘、鉾立、元滝伏流水、上郷温水路、象潟郷土資料館、九十九島
- ・ 8/15 由利本荘：花立クリーンハイツ、法体の滝

## 【現地審査まとめ】

## 1) 鳥海山・飛島ジオパーク構想地域の概要

鳥海山・飛島ジオパーク構想地域（以下、鳥海山・飛島）は山形県酒田市・遊佐町、秋田県にかほ市・由利本荘市で構成され、鳥海山国定公園を中心に5つのエリアに区分されている。申請地域のテーマは「日本海と大地が作る水と命の循環～暖流・活火山・湧水がおりなす自然と暮らし～」で、日本海拡大

初期にあたる約 1500 万年前の噴出した火山岩類から、有史に起きた鳥海山の噴火と繰り返す山体崩壊が生んだ景観や堆積物まで、幅広い時代の地球科学的価値を含む見どころを有する。これらの地球活動が生んだ景観や湧水、また対馬暖流が、対象地域の特異な自然環境と固有の歴史文化の構築に強い影響を与えている。

## 2) ジオサイトと保全

鳥海山・飛島には 61 のジオサイト候補地があり、それらの約半分が自然公園法や行政機関が制定する文化財保護条例等によって保護されている。ジオパーク活動をきっかけに、地域住民が主体的に地域資源の掘り起こしを始めた地域もある。これらジオサイトの保全は、ジオサイトカルテの作成や研究者や環境省をはじめとするステークホルダーとの間で実質的に行われている。一方で、景観保全については協議会もしくは自治体と地域住民の協力体制の構築と効果的な保全事業の展開が必要である。

## 3) 教育・研究活動

鳥海山・飛島では、大学との学術連携が進められている。特に、学術研究を奨励するため助成制度を設定し、専門家の地域研究の支援体制があること、またそこで得られた成果を地域住民に還元する仕組みが整っていることは評価できる。教育活動については、秋田大学教育文化学部の献身的なサポートにより、学校教育の現場で質の高いジオパーク学習が提供され、かつ教員がそのテクニックを学ぶ機会が設けられている。今後、構成市町の教育委員会が協議会員として加わることにより、地域内のジオパーク学習はさらに充実するであろう。頻繁な出前講座の開催や地域住民全戸訪問といった、手厚い社会教育事業のおかげで、地域住民のジオパークに関する理解は大いに向上しているが、この社会教育事業を持続的に行っていくためにはジオパークの概念を知り、それを正しく広めることができる担い手を増やすことが必要である。

## 4) 管理組織・運営体制

鳥海山・飛島はにかほ市長を会長、酒田市長を副会長とし、4 自治体と商工会や観光協会、農協、漁協などの中間組織、とびしま未来協議会や鳥海山にブナを植える会の民間団体の合計 21 団体で構成される。秋田・山形両県はオブザーバーとして、学術関係者や国の機関がアドバイザーに加わる。同協議会事務局は専任職員 5 名（内、ジオパーク専門職員 1 名）、補助員 1 名の 6 名体制であり、運営体制としては十分な人員が整っている。

協議会内には保全・調査・研究部会、産業・広報・啓発部会、ガイド・教育・防災部会の 3 部会があり、各部会でそれぞれの事業についての議論が行われている。しかしながら、各部会間の横の連携が十分に取れているとは言えず、当事者間での情報・課題共有や事業分担ができるよう、情報共有体制の改善が求められる。

## 5) 地域の持続可能な開発とジオツーリズムについて

鳥海山・飛島へは航空路、鉄道網、道路網、酒田市営定期船「とびしま」それぞれあり、公共交通の利便性は良い。中核となる拠点施設はないものの、立地の検証と予算の確保が同時に行われているほか、5 つのエリアにインフォメーションセンターが整備されている。ジオサイトには案内板と解説板、のぼ

り旗等が設置され、一定のビジビリティが確保されている。

ツーリズムの受け皿となるジオパークガイドの養成については、ガイド養成講座初級および中級を受講した第1期生が、手作りのイラストや模型等を用いながら、自分の言葉で解りやすく地域の価値を正しく楽しく発信しており、レベルは高い。ガイド養成講座は継続的に行われているため、第1期生のノウハウを継承していくための仕組みを作るのが望ましい。

とはいえ、まだ一般のビジターに提供するジオツアー商品がない。マーケティングリサーチの結果に基づき、短時間訪問から長期滞在まで、老若男女、個人から団体といった、多様なビジターの多様なニーズに合致したジオツアーの造成が望まれる。

## 6) 国際対応

パンフレット類は日本語版のみだが、ジオサイトに設置された解説板は日本語・英語の2か国語併記である。地質学的な事象は、その専門知識を有する人にとっては内容が理解されやすいが、歴史や信仰、地名といったローカルな文化や歴史は、特に外国人にはその意義が伝わりにくい。日本語の逐語訳ではなく、外国人向けの説明文を掲載するなどの配慮が望ましい。

## 7) 防災・減災教育

鳥海山・飛島は、鳥海山の噴火と山体崩壊、また日本海で発生する直下型の地震とそれに伴う津波に繰り返し襲われた地域であり、今後もこのような自然災害が起こりうる地域でもある。ガイドの解説の中でも地震や津波、山体崩壊などの自然災害のキーワードが出てくることから、今後はこれら自然災害のキーワードを広く社会に啓発するとともに、関連したジオツアーや学習会の定期開催が望まれる。